

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

サハラに舞う羽根

配給/アミューズピクチャーズ

2003 (平成15) 年7月10日鑑賞

<試写会>

Data

監督：シェカール・カプール

出演：ヒース・レジャー/ウェス・

ベントリー/ケイト・ハドソ

ン/ジャイモン・ハンスウ/

マイケル・シーン/ルパー

ト・ベンリー=ジョーンズ/

クリス・マーシャル

👁️👁️ みどころ

美しいタイトル。そしてアフリカの砂漠での迫力あるイギリス軍とエジプト反乱軍との戦闘シーンは見どころタップリ。白い羽根とは臆病者を表す不名誉なシンボル。出勤命令が下った翌日、除隊申請を出した主人公には当然のように親友や恋人から白い羽根が送りつけられてきた。自分はなぜ戦争に行くことを拒んだのか、そして反乱軍との厳しい戦いに臨む親友たちはどんな運命をたどるのか？美しい恋人との婚約は・・・？面白いテーマだが、インド人監督シェカール・カプールはこれを十分に説得力を持って描ききっておらず、消化不良の不满が残る。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<白い羽根は臆病者のシンボル>

『サハラに舞う羽根』とはなんとも思わせぶりでロマンティックなタイトル。そして、宣伝文句にも使われ、この映画の最初に流れる字幕は次のようなものだ。

「1884年 英国軍は、世界の4分の1を制覇」、「英国の若者は祖国とヴィクトリア女王のために戦い—戦わぬ者は家族と友人の恥とされた」、「その不名誉な臆病者を表すシンボルは白い羽根だった—」

<愛、友情、そして勇気>

英国が世界の4分の1に覇権の手を広げていたヴィクトリア朝時代。主人公のハリー（ヒース・レジャー）はその所属する連隊の仲間たちとの熱い友情の中、当然のごとくエリート軍人の道を歩んでいた。1番の親友はジャック（ウェス・ベントリー）だが、他にトレ

ンチ（マイケル・シーン）、ウイロビー（ルパート・ペンリー＝ジョーンズ）、キャスルトンらがいた。彼らは何の疑いもなく互いの友情を信じ、そして祖国のために命をかけて戦うことを当然の義務だと考えていた。そんなハリーの恋人はエスネ（ケイト・ハドソン）。エスネは一方で、ジャックからの愛も感じていたものの、ハリーとの婚約、結婚を望んでいた。そして婚約。周囲のみんなから祝福され、ハリーとエスネは今や幸せの絶頂だった。しかし・・・。

<第1の疑問—ハリーの除隊申請の動機は・・・？>

19世紀末、イギリスはエジプトの支配をめぐって苦勞を味わっていた。エジプトのスーダンでは、1881年以降イギリスによるエジプト支配に反発する暴動がおり、これがマフディによるイスラム復興主義と結びついた。そんな中、ハリーたちの連隊にスーダンへの出動命令が下された。しかし、この時ハリーはエスネとの別れ、戦争への恐怖、そして戦争参加への意味の喪失などの思いを裁ち切ることができず、除隊申請を提出した。その結果、同じ連隊の親友たちや、そして、遂にはエスネからも臆病者を意味する白い羽根が・・・。

この映画にはよくわからないことが多い。まず第1はハリーが出動命令が下った時に除隊申請を出さなければならなかったのかということ。ハリーの気持ちの動きがさっぱりわからない。恐怖、エスネを失うことのつらさ、戦地スーダンに赴くことの意義の程度・・・。そんなことは、連隊に入り士官としてのエリート教育を受けている中で十分考えていて当たり前のこと。そして、それに納得できずイヤになったら、さっさと別の道に移ればいいだけ。それなのに、出動命令が下った時になって、「よく考えてみたら僕は戦争には向かないからやめた」では、あまりにも無責任なことは明らかだ。この映画はなぜハリーは除隊申請を出したのか何が何ら説得力をもって描かれていない。

<第2の疑問—なぜハリーは1人戦場へ・・・？>

スーダンで戦うイギリス軍は苦戦。そんな情報を聞いたハリーはいてもたつてもいられず奴隷商人の案内で1人スーダンへ。そして、イギリス軍の駐屯地にたどりつき、頭にターバンを巻きひげぼうぼうとなって傭兵としてイギリス軍に加わった。しかし、ここでハリーは一体何をするのか、また何が出来るのか・・・。1人スーダンへ向かったハリーの動機がそもそも不十分だ。

<第3の疑問—アブーはなぜハリーの友人となったのか・・・？>

こんな中登場するのが得体のしれない傭兵のアブー（ジャイモン・ハンスウ）。彼は結果的に最後までハリーの側についてハリーを守る役割を演ずるが、その動機もよくわからない。パンフレットでは彼は奴隷階級出身の傭兵と書かれているが、それだけではとても身分関

係はわからないし、なぜイギリス人のハリーを助けるのか、またその後もいつも側に現れるのかさっぱりわからない。

<戦闘シーンは一流>

それなりにわかるのは戦闘シーンに至る経過。ハリーとアブーは傭兵の中に、反乱軍のスパイが潜んでいることをキャッチ。そしてこのスパイを追ってイギリス軍が向かおうとしている砦に入った。そしてこの砦が既に反乱軍の手に落ちていることを知ったのだ。この情報をイギリス軍に知らせなければ、この砦に向かってくるジャックたちイギリス軍は全滅する。そのためハリーはアブーを伝令に送った。しかしハリーはイギリス軍の正規の機関として働いていたのではないうえ、ハリーが傭兵の中に潜んでいたことすら誰も知らないことだ。そんな中でアブーの話を信頼しろという方が無理だろう。アブーの情報を無視したイギリス軍は、反乱軍に取り囲まれた。そこで必死の「角陣」を組んでの戦い。これはさすがに迫力がある。イギリス軍は何とか全滅を免れて一部お退却。そして戦場にはハリーとアブーの2人そしてキズつき目が見えないと叫ぶジャックのみが残った。ジャックを助けるハリー。目が見えないジャックは「君は誰だ？」と尋ねながら手でハリーの顔をなぞる。そのジャックの服からこぼれおちるのはエスネからの手紙。ハリーはこのエスネからの手紙を読み、エスネの気持ちかジャックに移ったことを知る……。しかしこれも不自然。そもそもなぜ3人だけが助かり戦場に残れるのか？そしてジャックの服からこぼれおちた手紙を勝手に読んだハリーはイギリス紳士といえるのか……。どうもストーリーの展開に納得がいかない。

<友人トレンチの救出に向かうハリー>

ハリーの次の活躍はあの戦場で反乱軍の捕虜になったトレンチを助けるため、自らも捕虜となって、トレンチ脱出のために働くということだ。しかしそのもくろみは失敗。2人は捕虜として働かされ、極度の衰弱状態に陥っていたが、これを救ったのがアブー。この脱出方法もちよっと突飛。すなわち仮死状態となる薬を飲み、死体となって葬り捨てられた中から脱出するというものだ。ハリーとトレンチはアブーがひくラクダの背中に乗って無事脱出……。まんまと成功したかのように見えたが、反乱軍のボスもバカではなかった。「2人が同じ日に死んだ」と聞き、ピンときたボスは直ちにこれを追った。普通ならこれでせつかくの脱出劇もジ・エンドだが……。ここからまた不可解なハリーの力が発揮される。極度に衰弱していたはずのハリーは、ボロボロに殴られ蹴られ今にも命を失いそうになる直前、バカ力を発揮して頭突きをくらわせ、相手をノックアウト……。ストーリーをつくりたい気持ちはわかるものの、茶化す気はないがあまりにも不自然なのでちょっとがっかり。

＜エスネが選ぶのはジャック or ハリー＞

帰国したジャックは視力を失い、エスネはそれを支える婚約者となっていた。そんな中帰国したハリーはジャックをたずね、白い羽根を受け取った自分をかばってくれたジャックに感謝し、ジャックとエスネの幸せを願った。そこで机から落ちた手紙をひろいあげて、ジャックに手渡すハリー。あの戦場での状況と同じシーンだ。そしてハリーの顔を手でなぞるジャック。ジャックにはその感触によって、あの時あの砂漠で命を救ってくれたのがハリーであることが今はじめてわかったのだ……。そしてジャックは……。？このエスネとハリー、ジャックの3人の「恋愛ストーリー」はそれなりに説得力があるが……。

＜カプール監督の舞台あいさつ＞

7月10日の試写会にはカプール監督が舞台あいさつに現れ、司会の森川みどりさんのインタビューを受けた。カプール監督の最初のあいさつは大阪弁で「どうもどうも…」そして「阪神タイガース強いね。」というものだった。実は翌日の7月11日の甲子園球場での阪神 vs 巨人戦で始球式をつとめることになっていたのだ。

カプール監督はこの映画製作について砂漠での苦労などいくつかの質問に答えていたが、彼はインド人。私が思うにこの映画の描き方にいろいろとわかりにくい面があるのはそのためか……。

＜『アラビアのロレンス』越えはとても……＞

パンフレットには「迫力ある戦闘シーンは『アラビアのロレンス』に匹敵する。」とある。確かに戦闘シーンだけ見ればそうかもしれない。しかし歴史上の事実としてロレンスという人物像を壮大なスペクタクルの中で描きあげたあの『アラビアのロレンス』とこの映画とは、ストーリーの「出来」において雲泥の差がある。つまりこの映画のストーリーには無理があるわけだ。そして何よりの欠点は既にも書いたようにハリーの行動の動機がわからないこと。そしてアブーという人物との接点やその結びつきの必然性についても説得力不足といわざるを得ない。

2003（平成15）年7月14日記